

鳥羽勝光明院跡出土の孔雀文金具

— 発掘された荘厳具から院政期の御堂をイメージする 1 —

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



図 1 a 勝光明院跡出土の孔雀文金具



図 1 b 首の羽毛 (筆者撮影)



図 1 c 風切羽 (筆者撮影)

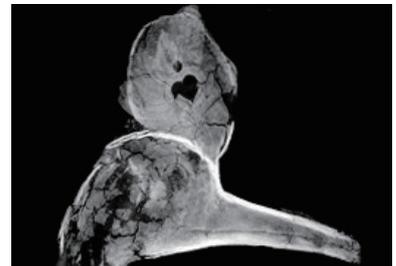


図 1 d 冠羽 X線写真 (龍谷大学提供)

はじめに 平安時代中・後期の京およびその周辺には天皇・貴族により多くの寺院が建立されましたが、そのほとんどが失われてしまいました。宇治の平等院鳳凰堂（天喜元年(1053) 建立）は、その姿を伝える希有の存在です。しかし、発掘調査で見いだされた荘厳具のなかには、在りし日の優美な建築の姿を想像させる名品があります。今回はその一つ、鳥羽の勝光明院跡で発見された孔雀文金具（図 1 a）を紹介し、その復元と堂内の荘厳をイメー

ジしてみたいと思います。

発掘された孔雀文金具 勝光明ごんじ院は鳥羽上皇の御願寺で、保延 2 年（1136）、阿弥陀堂が建立されました。この阿弥陀堂は平等院鳳凰堂を参考にしており、建設過程では大工や仏師・絵師を鳳凰堂に派遣し、仏像や荘厳の詳細を記録・報告させています。孔雀文金具はこの阿弥陀堂の前池の中から発掘されました。

見つけたのは、頭から胸にかけての大きな部分と、右脚の一部、いくつかの風切羽とぎんの断片で、鍍金とぎんがほ

どこされています（図 1 a・b・c）。これらの断片ですぐに思い浮かぶのが、岩手県平泉の中尊寺金色堂（天治元年（1124） 建立）です。金色しゅみだん堂の須弥壇こうさまの格狭間には、この金具にそっくりの優美な孔雀のレリーフ（浮彫）が飾られているのです（図 2 a）。

復元される姿 金色堂の西南壇の孔雀（図 2 b）を参考に、勝光明院跡出土金具を復元的に配置してみると、翼を広げ、右脚を持ち上げた、金色堂のレリーフにそっくりな姿